

まちづくりの場を動かす コミュニケーション条件

羽鳥 剛史

¹ 正会員 愛媛大学准教授 社会共創学部 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番)

E-mail: hatori@cee.chime-u.ac.jp (Corresponding Author)

本研究では、まちづくりの現場が動いていく条件について、研究者と現地の住民や関係者とのコミュニケーションの観点から理論的に検討する。具体的には、学習をコミュニケーションな現象として捉えたベイトソンの論考を中心に、関連するコミュニケーション理論を踏まえながら、研究者と住民や関係者とのインタラクティブな関係性を両者の学習過程として記述する。そして、まちづくりの場が“動く”もしくは“動かない”とはどのような事態を指すかを明確化することを試みる。その上で、研究者と住民・関係者の協働の下、まちづくりの場が動いていくためのコミュニケーションのあり方を検討し、そこで研究者の果たすべき実践的な役割や課題について考察する。

Key Words : *Machizukuri, practical researcher, learning theory, generative communication, performative utterance*

1. はじめに

土木計画学に関わる研究者がまちづくりの現場に身を置く時、外部の専門家としてその専門的な知見を供与する従来の役割を超え出て、自らも現場の一員として他のメンバーと積極的にコミュニケーションを図りながら、その場を共に“動かしていく”役目を担うことが少なくない。しかし、まちづくりという生きた現場を“動かしていく”上で、本来外部者たる研究者はどのような役割を果たし得るのであろうか。この問いに答える上では、そもそもまちづくりの現場が“動く”という現象がどのような事態を意味しているかについて明確化しておくことが肝要であろう。

そこで、本発表では、まちづくりの現場が動いていく条件について、研究者と現地の住民や関係者とのコミュニケーションの観点から理論的に検討する。具体的には、学習をコミュニケーションな現象として捉えた人類学者ベイトソンの論考を基に、研究者と住民・関係者とのインタラクティブな関係性を両者の学習過程として記述する。そして、美学者の伊藤がその著書『手の倫理』において論じた生成的なコミュニケーションに関する論考を中心に、まちづくりの場が“動く”もしくは“動かない”とはどのような事態を指すかを明確化することを試みる。その上で、研究者と住民・関係者の協働の下、ま

ちづくりの場が動いていくためのコミュニケーションのあり方を検討し、そこで研究者の果たすべき実践的な役割や課題について考察する。

2. ベイトソンの学習理論

伝統的な学習観によれば、「学習」は「経験の反復による比較的永続的な行動の変容」と定義される¹⁾。しかし、人類学者グレゴリー＝ベイトソンは、こうした従来の学習観と異なり、学習をコミュニケーションな現象として捉える見方を提示している²⁾。彼は、ラッセルとホワイトヘッドの論理階型理論を基にして、学習現象を複数の階層に分類・整理している。以下では、各レベルの内容を概説する(表-1)。

まず、ゼロ学習は、反応が一定したまま、その名称の通り学習が行われない状況を表している。そこでは、外界からの一定の刺激に対して、一定の反応が返されるだけであり、試行錯誤やそれに伴う主体の変化が引き起こされない。ここで、野村³⁾に倣って、頭を固いものに打ち付ける癖のある子どもとその母親の例を挙げて説明すると、ゼロ学習では、子どもの振る舞いに母親が唯々ショックを受けるという反応が該当する。次に、学習 I は、反応が 1 つに定まる、その定まり方の変化を表す。それは、パブロフの古典的条件付けのように、ある反応が試

表-1 ベイトソンの学習理論

タイプ	内容	研究者	地域の住民・関係者
ゼロ学習	固定化された反応. 試行錯誤や変化がない.	紋切型の理論や代替案を押し付ける.	固定化・ステレオタイプ化された見方で地域を捉える.
学習Ⅰ	試行錯誤を伴う学習. 反応の変化. 慣れ. 反復.	地域の状況に合わせて代替案を試行錯誤する.	研究者の考え方や代替案を受け入れていく.
学習Ⅱ	関係性(コンテキスト)の学習. 「こうしたら上手くいく」という状況・場の知識. 相互作用の捉え方.	地域との関係性を構築する. 自分の理論や方法論が通用する条件を学ぶ. 地域の特性(自分への見方)や地域とのつきあい方・作法を身に付ける.	研究者との関係性を構築する. 研究者の理論や方法論が通用する条件を把握する. 研究者の習性(地域への見方)や研究者とのつきあい方を理解する.
学習Ⅲ	相手との関係性を変えていく学習. 自己の再構成(自分の性格, 価値観, 流儀, 原則等)を伴う. 相手を自分のことのように見られる.	自分(自己の人格, 価値観, 流儀, 原則等)も変わりながら, 地域と共に成長・変化する.	地域(規範, 価値, 文化, 風土等)も変わりながら, 研究者と共に成長・変化する.

行錯誤を経て所定の選択肢群の中から選び取られる状況を指す。母と子の例では、柔らかい物を敷いたり、心地よい音楽を流したりするといった対応が学習Ⅰに当てはまる。学習Ⅱは、学習Ⅰの進行プロセス上の変化であり、学習の仕方の学習を意味する。そこでは、学習Ⅰのコンテキストとなる他者との関係性を括り取る、その括り方の変化や、それに伴って選択肢群そのものが修正される変化が生じる。母と子の例では、2人の関係性に焦点が当たり、例えば「ごめんねーいいよ」というコミュニケーション(関係性)が見出される場合が学習Ⅱに相当する。最後に、学習Ⅲは、学習Ⅱの進行プロセス上の変化であり、様々な選択肢群が存在しているシステム全体が修正される変化を表す。そこでは、学習Ⅱによって身に沁みついた前提を問い直し、自己の根本的な組み換えが求められる。しかし、学習Ⅲが創造的に展開した場合、学習Ⅱに潜在する矛盾が解消されると共に、ベイトソンの表現を借りれば、「個人的アイデンティティがすべての関係のプロセスのなかへ溶出した世界が現出」²⁾する。やや大仰な言い回しではあるが、母と子の例を用いるなら、両者が共に成長・変化しながら、1つ1つの場面に2人で対応していくことを決意・実践していく状況が考えられる。

まちづくりの場に研究者が参画し、現地の住民と関わり合いを持つ時、その関わり方には様々な発展段階があると考えられる。表-1では、ベイトソンの学習理論に基づいて、研究者と地域住民との関係性の段階を例示している。まず、ゼロ学習では、研究者も地域住民も一定の反応しか示さず、それぞれ主体としての変化が見られない。例えば、研究者は、地域の実情を考慮せずに従来の型に嵌った理論や決まり切った代替案しか提示せず、地域側も固定化された見方で自分達の地域を捉えるような

状況がゼロ学習に相当しよう。次に、学習Ⅰでは、お互いに試行錯誤しながら、既存の代替案の中からより良い解決策を模索する。研究者は地域の実情に併せて理論の妥当性を検証し、それに従って代替案を提案する。そして、地域側でもその提案を受け入れるか否かを判断するような状況が考えられる。ただし、学習Ⅰでは、その反応が習慣化した場合には、それ以上の変容は期待されない。一方、学習Ⅱでは、研究者と住民が相互の関わり方を学んでいく。この学習では、研究者は当該地域とのつきあい方やその作法を身に付け、地域側も研究者とのつきあい方を理解していき、両者の間で継続的な関係性が構築される。最後に、学習Ⅲでは、研究者と住民がお互いのアイデンティティの再構成を図りながら、相互の関係性をより良いものに変えていく。研究者は、地域と関わりながら、自らの人格、価値観、習性、流儀、原則等、研究者としての自己を規定する諸特性を省み、地域側も、研究者との付き合いの中で、地域内の規範、価値、文化、風土等、自分達の地域を規定する諸前提を見直しながら、共に成長・変化していくことを目指していく。

3. コミュニケーションの2つのモード

まちづくりの場が“動いている”状況は、研究者を含むメンバー間関係性が流動的に変わっており、ベイトソンの言う学習Ⅲが成立しているものと捉えられる。こうした学習Ⅲを特徴づけるコミュニケーションの形態として、伊藤が『手の倫理』⁴⁾において述べている「生成的なコミュニケーション」を挙げることが出来る。伊藤は、図-1に示す通り、コミュニケーションのモードとして、従来の伝達モードと区別して、生成モードと呼ばれる新しい形態を提示している。ここで、伝達モード

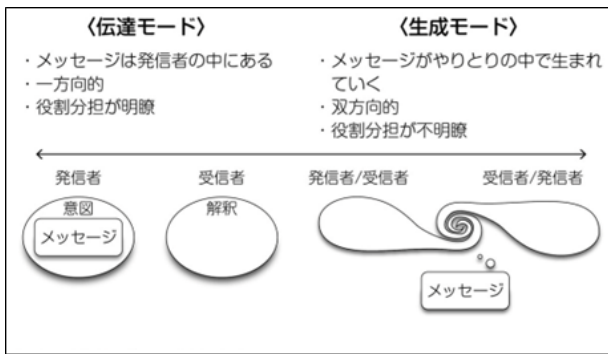


図-1 伝達モードと生成モード (伊藤⁴⁾より抜粋)

は、古典的なシャノンの通信モデルに代表されるように、発信者があらかじめ準備されたメッセージを受信者に一方的に伝える形態を指す。そこでは、メッセージを送る発信者とそれを受け取る受信者の役割が明確であり、受信者が発信者に干渉する逆方向の作用は想定されていない。一方、生成モードは、双方のやり取りの中で、メッセージの意味やメッセージそのものが生み出されていくタイプのコミュニケーションを表している。このモードでは、伝達モードとは対照的に、両者のやり取りは双方向的であり、発信者と受信者という役割分担が曖昧となる。生成モードは、メッセージやその意味が「その場で作られていく」という即興性あるいはライブ感によって特徴づけられる。こうしたコミュニケーションは、水谷⁹⁾によれば、「意味の発生がコミュニケーションの外部に由来するのではなく、まさしくコミュニケーションそのものの内部においてはじめて意味が発生するということ、つまり意味創造の場」となる。そこでは、お互いが発信者と受信者という役割を微調整したり交渉したりする「じりじりとした動的なプロセス」が展開する。この動的なプロセスにおいては、お互いに相手の立場に身を置き、そこから世界を捉えるような関係性が成り立っており、その関係性の中から生まれてくる共通のメッセージに注意が向けられる。

伊藤は、以上の2つのコミュニケーションモードを哲学者の坂部⁹⁾が注目した“ふれる”と“さわる”という2つの触覚の違いによって説明する。すなわち、坂部は、双方の違いについて「ふれるという体験にある相互嵌入の契機、ふれることは直ちにふれ合うことに通じるという相互性の契機、あるいはまたふれるということが、いわば自己を超えてあふれ出て、他者のいのちにふれ合い、参入するという契機が、さわるということの場合には抜け落ちて、ここでは内—外、自—他、受動—能動、一言でいってさわるものとさわられるものの区別がはっきりしてくる」⁹⁾と述べている。伊藤によれば、ここに言う一方的な“さわる”という方法が“伝達モード”に、相互的な“ふれる”という方法が“生成モード”に対応する。

生成モードでは、我々が生き物に“ふれる”ように、相手を生きた存在として慮りながら、その相手の内部に入り込み、その内部から相手の心の動きや緊張感を読み解くことが求められる。

現代社会におけるコミュニケーションは、伝達モードの様に、発信者と受信者という自他の境界を明確に区別することを前提にする場合が少なくない。まちづくりの現場において研究者もまた、自らの専門性を相手に一方的に伝えようとする衝動に駆られるかもしれない。特に、研究者は、自らの善意によって自分の知識や技術を相手に伝えたいと思うほど、伝達モードに陥りがちとなる。

しかし、伝達モードでは、研究者と住民や関係者との間で一定の情報が伝達されることはあっても、それ以上にその場が“動く”ということは期待できない。熊谷⁷⁾が介助の現場を対象に述べている様に、介助者が被介助者に身体の正しい使い方を伝えようとする程、両者のやりとりは暴力的なものとなり、熊谷の言葉を借りれば、<加害/被害関係>に陥る可能性がある。こうした事態を防ぐ上でも、研究者は、まちづくりの場における即興性やライブ感を楽しみながら、メンバーとの生成的な関係を築いていくことが求められる。そのためにも、研究者には、自らの研究者としての役割を一旦保留し、そのコミュニティの“内部に入って”、住民の立場に“なってみる”という経験が必要となる。この様にコミュニケーションを通じて相手の中に入るという経験は、文化人類学や言語学の分野において論じられてきた「共在感覚」⁸⁾、「シンローグ」⁹⁾、「共話」¹⁰⁾といった現象と通底するものと考えられる。さらに言えば、生成モードの動的なプロセスは、羽鳥他¹¹⁾によって論じられている様に、メンバーがそれぞれ自らの役割を自律的に発揮しながらも、全体の課題解決に向けて他者と協調していく「ハーモニー」とも相通ずるものである。なお、コミュニティの“内部に入る”という経験は、実は外部者たる研究者だからこそ出来るものとも言える。すなわち、そもそも地域内の住民には、“自らの内部に入る”という経験は厳密に言えば出来ないのである。従って、コミュニティの内部に入り、住民と共にその場を動かしていくことが出来るのは、外部者たる研究者にこそ課された重要な役割であると捉えることも出来る。

4. 場のデザイン知

岡田¹²⁾は、まちづくりの生きた現場をシステムック(全身的)に捉える概念枠組みを提起しており、その中で、計画学の専門家がまちづくりの現場に主導的に関わる上では、地域の関係者との協働実践のための出会いと学びを生成する「コミュニケーション・スペース」を形成・発展させることの重要性を説いている。本稿では最

後に、前章までの議論を踏まえて、こうしたコミュニケーションの場づくりの課題に関して、1) 生成モードと伝達モードの補完性、2) 言語コミュニケーションの2点から検討してみたい。

(1) 生成モードと伝達モードの補完性

上述した通り、まちづくりの場が“動く”という状況では、伊藤の言う生成的なコミュニケーションが展開しているものと捉えることが出来る。しかし、場のデザインという観点から見れば、この事は、生成モードのみがまちづくりの場を動かす原動力となることを必ずしも意味するものではないように思われる。特に、まちづくりの実践において土木計画学や関連する学問分野の専門性が求められる場合には、研究者には専門家の立場からそれらの知見を現場に伝達する役割が求められる。そこでは、医者が患者の患部を“さわる”という伝達モードに見られるように、現場をあえて客体として扱い、それと接していくことが必要となる。さらに、生成モードにおけるメンバー間の相互関係は、ともするとメンバー間の“馴れ合い”や“マンネリ化”に陥る可能性も懸念される。こうした状況を回避する上でも、新しい知識や情報をまちづくりの現場に提供し、その活性化を図るプロセスを確保しておく必要がある。

以上の議論を踏まえると、まちづくりの場が動いていく上では、研究者と現地の住民との間で生成的なコミュニケーションが展開すると同時に、それを伝達的なコミュニケーションによって補完することが、場のデザインの重要な課題であると言える。

(2) 言語コミュニケーションの問題

本稿で着目した伊藤⁹⁾の論考は“ふれる”と“さわる”という触覚を対象に、人間関係やコミュニケーションの問題を検討している。一方、まちづくりの場では、伊藤が論ずる生成モードや伝達モードを言葉や会話を中心として進めていく場合が殆どであろう。しかし、前節で述べた通り、2つのモードを補完していく上では、両モードの間で言語の違いが顕在化する可能性がある。この点に関して、以下では文化人類学者の川田⁹⁾の議論を参照し、まちづくりの場における言語コミュニケーションの問題を明確化することを試みる。

さて川田は、アフリカの無文字社会を対象に、お伽噺や神話などを全員で語り合う「座」の状況を調べているが、そこでオースティンの言語行為論を参照しながら、その語りの意味や機能を分析している。ここで、オースティンは、記述的・事実確認的な発話に対して、約束、命令、願望、陳謝等、発話そのものが行為としての力を持つような言語領域を区別し、それを行為遂行的発話と呼んでいる。川田はこのオースティンの考え方を踏まえて、座における発話を「行為遂行性」、「情報伝達

性」、「演戯性」の3つの側面から検証している。ここで、行為遂行性は、上述の通り、発話が一定の行為として機能する側面を表しており、川田によれば、そこでは発話された場やその文脈等の言語外的状況に照らして「適切／不適切」かが問われる。情報伝達性は、発話が不要なノイズや冗長性を廃して一定の情報を伝達する側面を表しており、そこでは発話によって指示されるものとの関連において「真／偽」であるかが問われる。演戯性は、声質や呼吸を含めて、発話が「話芸」としてパフォーマンスを発揮する側面を表しており、そこではその言表内において「興／不興」をもたらしかどうか問われる。川田は、こうした3つの観点から社会における人々の言表を位置付ける枠組みを提案している。

まちづくりの場では様々な発話行為が複雑に錯綜するが、生成モードと伝達モードではそれぞれ異なる発話特性が卓越するものと考えられる。すなわち、地域の文脈に埋め込まれた生成モードでは、行為遂行性や演戯性はその発話の大きな部分を占めるものと考えられる。ここでは、お互いに挨拶や儀礼的なやりとりを交わす中で、自分達の社会的関係を強化したり、コミュニティの慣習との適合性を確認し合ったりしている。同時に、その場で話すということ自体が演戯性を帯びることも少なくなく、それが場に面白みや楽しみを与えることとなる。研究者もまた生成モードに参画する際には、その場に自らの口演を通じて加わり、その行為遂行性や演戯性を発揮することが求められよう。特に、初めてまちづくりの場に参加する者にとっては、その場で迎々しくも“話す”という行為が場の仲間入りをする重要なきっかけになり得る。一方、外部の専門家による伝達モードは、その情報伝達性を特徴としている。そこで研究者は、自らの言表が学問的な観点から真実であるかどうか問われる。この時、研究者は、精密なデータや確固たる証拠を抛り所に、専門家としての自らの見解の妥当性を立証する責務を負っている。

この様に、まちづくりの現場において生成モードと伝達モードが展開する時、異なる発話行為が交錯することとなる。特に、生成モードにおける行為遂行性が依拠する「適切性」という基準と、伝達モードの情報伝達性が依拠する「真実性」という基準の間には容易に乗り越えがたい相違が存在している。すなわち、地域の住民にとっては、まちづくりの場における発話が当該地域の文脈や慣習において適切であるかどうか重要な関心事となる。一方、専門家にとっては、そこでの議論が自らの拠って立つ学問分野の基準に則って妥当であるかどうか主要な関心事である。こうした相違はショーン¹³⁾の言う厳密性と適切性のジレンマとも関連している。残念ながら、こうしたジレンマを克服する上で、どの場面でも通用する普遍的な解決策は見当たらない。その一方で、

行為遂行性や演戯性を帯びた発話と情報伝達性を帯びた発話は必ずしも背反的な関係にあるとも限らない。それは、例えば、挨拶を交わすという行為遂行性の高い発話においても、そこから相手の健康状態や近況に関わる情報が伝わる場面を想像してみれば理解できるであろう。この点を踏まえれば、研究者は、まちづくりの場における生成的な関係性の中で、自らもその一員として現地の住民や関係者と生き生きと語り合うと同時に、時には厳格な専門家として自らの専門的見解を伝える伝達的な役割を果たし、そうした実践の中で自らの言表の適切性と真実性の双方を満たすように努めていく他ないであろう。少なくとも研究者には、こうした異なる会話モードとそこでの容易に相容れがたい規範的な基準を共に引き受ける覚悟と、現場の協働実践の中でそこに折り合いを付ける作法を身に付けることが求められているように思われる。

謝辞：本稿を取りまとめるにあたり、岡田憲夫氏（京都大学名誉教授）、山泰幸氏（関西学院大学教授）、出村嘉史氏（岐阜大学教授）、大西正光氏（京都大学准教授）、山口敬太氏（京都大学准教授）、片岡由香氏（愛媛大学講師）、小谷仁務氏（京都大学助教）との議論から多くの示唆を得ており、ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 佐伯胖 監修, 渡部信部 編: 「学び」の認知科学事典, 大修館書店, 2010.
- 2) グレゴリー=ベイトソン (佐藤良明訳): 精神の生態学, 新思索社, 2000.
- 3) 野村直樹: みんなのベイトソン—学習するってどういうこと?, 金剛出版, 2012.
- 4) 伊藤亜紗: 手の倫理, 講談社, 2020.
- 5) 水谷雅彦: 伝達・対話・会話—コミュニケーションのメタ自然誌へむけて, In: 谷泰(編): コミュニケーションの自然誌, 新曜社, 1997.
- 6) 坂部恵: 「ふれる」ことの哲学—人称的世界とその根底, 岩波書店, 1983.
- 7) 熊谷晋一郎: リハビリの夜, 医学書院, 2009.
- 8) 木村大治: 共在感覚—アフリカの二つの社会における言語的相互行為から, 京都大学学術出版会, 2003.
- 9) 川田順造: 口頭伝承論, 河出書房新社, 1992.
- 10) 水谷信子: 共話から対話へ, 日本語学, Vol.12, No.4, pp.4-10, 1993.
- 11) 羽鳥剛史・杉田篤史・志田尚人・片岡由香・大西正光: 協働の場づくりに向けたハーモニー共同行為の効果検証, 土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol.78, No.6, pp.II_460-II_469, 2022.
- 12) 岡田憲夫: マチ (コミュニティ) が変わる・人が変わるための小さな協働実践デザインと進化する四面会議システム-BECAUSE プロセスモデルの活用, 第 64 回土木計画学研究発表講演会講演概要集, 2021.
- 13) ドナルド=ショーン (佐藤学, 秋田喜代美訳): 専門家の知恵—反省的実践化は行為しながら考える, ゆみる出版, 2001.

(Received September 30, 2022)